



電
氣
の
力

目覚ましが鳴って、おれはベッドから身体を起こす。

早朝の部屋は薄暗くて周りにはよく見えないけれど、出勤時間が遅い妻が隣で眠っているのが気配で分かる。

おれはそっと寝室を出て、リビングの電気をつける。

部屋がパツと明るくなって、一瞬だけ目を細める。

そのうち明るさに慣れてくると、おれは大きく伸びをした。

見上げた天井には照明がある。

そこから降り注ぐ光のシャワーを、思うぞんぶん全身で浴びる。

自然光ではまったくないのに、なんだかおれは太陽を感じる。

風も感じる。

水も感じる。

じわじわと力が湧いてくるような感覚になる。

よし、今日もがんばるぞ――。

気力はすっかり充電されて、支度をととのえ仕事に向かう。

我が家は電気にこだわっている。妻と一緒に選んだエレクトアリーから、じかに電気を買っているのだ。

国の電源構成のうち、再生可能エネルギーの比率が飛躍的に高まってからずいぶん経つ。昔はその多くを火力や原子力に頼っていたが、二酸化炭素の排出問題や化石燃料の枯渇問題、あるいは安全性への懸念によって、再生可能エネルギーへの移行を求める声は少しずつ、だが確実に強まっていった。

その一方で、課題は山積していた。

再生可能エネルギーの多くは火力や原子力に比べてエネルギー密度が低いことや、コストが高いこと。発電量が気象条件に左右されて不安定であったり、需要に合わせた出力のコントロールが難しかったりすることなどだ。

それでも、発電事業への参入障壁が低くなった影響で、若者たちを中心に本業や副業で太陽光や風力による発電事業に取り組む人が増えはじめた。その背景には、環境問題の悪化などで被害をこうむるのは自分たちの世代だという危機感や、幼少期からの環境エネルギー教育で培われた倫理観などもあったといわれている。

いずれにしても、若い世代は立ち上がった。そして、ワインをつくるワイナリーになぞらえて、自らを電気をつくる「エレクトリシタリー」、略称「エレクトアリー」と呼び、自負をもってクリーンな発電に取り組んだ。

その意識はじわじわとほかの世代にも広がっていき、自分で発電事業は行わなくとも、使用する電気はなるべく再生可能エネルギーによるものを、という考えを持つ人が増加した。

ブレイクスルーとは得てしてそういうときに起こるもので、急速な技術の進歩で再生可能エネルギーのエネルギー密度は向上し、コストも低減していった。

それらに加えてもうひとつ、発電量の安定化と需要に応じた出力変化に関する課題も解決された。キモとなったのは、大量の電気をほとんどロスなく長期保存できる超高性能の蓄電池の登場だった。これによって、発電できるときにどんどん発電して電気を貯めておけるようになり、そこから自在に出力することで需要の変化にも対応できるようになった。

こうなると、ますます発電事業に乗りだす人は増えていき、エレクトアリーの数もいっそう増える。それぞれが独自性を打ちだすために、自社の方針を世の中に向けて発信したり、発電事業以外の慈善活動などにも力を入れた。

おれも電気の契約をどこと結ぶかにあたって、妻と一緒に多くのエレクタリーを訪問して現地を見学させてもらった。最終的に我が家が契約した先は、国がブランドに認定しているエレクタリーのひとつだった。そこは事業収益の一部を環境系のスタートアップに積極的に投資していたり、就業時間のなかで社員全員で海岸のゴミ拾いに参加していたりと、環境に対する姿勢がすばらしかった。そのこだわりの分だけほかより電気代は高かったけれど、経営者の人柄にも魅了されて、二人でここにしようと決めたのだった。

以来、おれは家の照明を浴びると、なんだか気分が高まるようになった。

もちろん、発電方法がどうであろうと電気は電気で、物理的な性質が変わるわけでは決していない。が、その背景にあるものに思いを馳せると、ただの電気とはやっぱり違うような気がしてしまう。

こだわりの電気が、日々の生活を豊かにしてくれた。

そんなふうに思っている。

夕方になって仕事を早めに切り上げると、おれは足早で会社を出た。

やってきたのは、結婚10周年を祝うために前から予約していたレストランだった。先に到着していた妻と合流すると、やがてワインが運ばれてきた。

それは10年もの高級ワインで、妻は目を丸くした。

「これ、どうしたの……？」

「せっかくの10周年だしと思って、手に入れておいたんだよ」

喜ぶ妻の顔を見て、サプライズが成功してよかったな、と満足する。

妻をレストランの庭園に誘ったのは、ワインと食事を楽しんだあとのことだった。

その庭園は真っ暗で、妻は困惑ぎみに声をあげた。

「何があるの……？」

その直後のことだった。

あたりがいっせいに明るくなった。

庭園に植えられた木々は、雪をまとったように白銀に輝いていた。生垣はバラの花をモチーフにした無数の赤い光で埋め尽くされて、地面は青白い光が波のように行き来している。

呆気にとられている妻に、おれは二度目のサプライズが成功した、とうれしくなる。

「こっちも10年物でさ。やっぱり、せっかくだからと思って」

「それって、この電気のこと……？」

おれはうなずく。

電気を長期保存できる技術が確立して以来、新しく生まれた贅沢品があった。

各エレクタリーが発電した電気の一部を蓄電池で保存しておき販売している、ヴィンテージものの電気のことだ。

おれはこの日のために契約先のエレクタリーで10年前に発電された電気を購入して、レストランに事前に送電しておいてもらっていた。

当然ながら、ヴィンテージといっても電気がワインのように熟成するはずもなく、やっぱり物理的にはただの電気だ。が、ヴィンテージものの電気でもした灯りや、それを使って聞く音楽からは、特別な味わいを感じる人が少なくない。実際のところは錯覚に過ぎないけれど、個人的にはこう思う。

見たり聞いたりした人に感じさせる何かがあるのなら、それは熟成の効果ってことでいいんじゃないかな、と。



やがて、イルミネーションに見入っていた妻が口を開いた。
「ほんときれい……」

隣を向くと、妻の目は少しうるんでいるように見えた。

この10年、いろんなことがあったなあ……。

おれも感慨深い気持ちになって、おのずとこう口にしていた。

「これから、またよろしく」

「こちらこそ」

そのとき、イルミネーションがパツと消えて、あたりは再び真っ暗になった。

「もう切れたかあ……ごめん、ヴィンテージだから高くてあんまり買えなくて……」

「ううん、十分すぎるくらいだったよ。うれしかった、ありがとね」

それにしても、と妻はつぶけた。

「熟成した電気の力ってすごいよね」

暗闇の中で、妻は笑った。

「いろいろ思いださせてくれたしさ。なんだかあなたも、ちょっと素敵に見えないこともなかったし」